

薬局薬剤師1万人増必要

30年度以降、処方箋増で

科学院・此村氏が推計

薬局薬剤師が1日に応需可能な処方箋枚数が現行のまま推移すると仮定した場合、院外処方箋枚数の増加に伴って2030年度以降は18.8万人の薬局薬剤師数が必要になるとの推計結果を、国立保健医療科学院保健医療経済評価研究センターの此村恵子氏がまとめた。現行から約1万人増の薬剤師が必要になるという研究結果だが、一方で業務効率化によって応需可能な枚数を増やせば、現行の18万人でも十分に対応できるとの見通しも導き出した。

此村氏は、将来必要になる薬局薬剤師数を解析するため、人口動態推測をもとに、今後の年間院外処方箋枚数を予測。高齢者人口の増加に伴い、30年度や35年度の枚数は、19

年度に比べて約5%増の8億6000万枚前後になると推計した。将来、薬局薬剤師が在宅医療に向かう回数も試算した。

並行して、薬局薬剤師が処方箋1枚の処理に費やす平均時間を算出した。根拠には、15年に実施された厚生労働科学研究「薬局・薬剤師の業務実態の把握とそのあり方に関する調査研究」のタイムスタディ調査の数値を活用。10薬局の平均的な業務時間として示された▽受付から処方監査2分50秒▽調剤2分39秒▽監査3分19秒▽薬剤交付・服薬指導3分6秒▽薬歴記載6分43秒—の合計値約18分40秒を、1枚の処理に費やす平均時間として設定した。

その上で、今後予想される対人業務の拡充や業務の効率化を踏まえ、様々なシナリオを設けて推計値を算

出。その値をもとに、薬局薬剤師が1日に応需可能な院外処方箋の平均枚数を出し、在宅医療に費やす時間やパート薬剤師の存在、院外処方箋枚数の増加を考慮して、将来必要とされる薬局薬剤師数を解析した。

その結果、各業務に費やす時間が現行のまま推移すると仮定した場合、1人の薬局薬剤師が1日に応需可能な処方箋枚数は22.7枚で、30年度以降は18.8万人の薬局薬剤師数が必要になると推計。現行より約1万人増やす必要があることが分かった。

一方、薬剤交付や服薬指導に費やす時間を現行の2倍に増やしたシナ

リオでは応需可能枚数は1日19.3枚に減少し、必要な薬剤師数は30年度以降22.1万人に増加。対人業務を拡充させた場合、現行より約4万人増やす必要があることが明らかになった。

逆に、ITや機器の活用などで薬歴の記載に費やす時間を現行の半分に減らしたシナリオでは、応需可能枚数は1日27.4枚に増え、必要な薬剤師数は30年度以降15.7万人で済むと予測した。業務効率化に取り組めば、現行の薬局薬剤師数でも増え続ける院外処方箋に対応できるといった結果になった。

(2021年4月7日掲載)



薬剤師が扱う医学情報は多岐にわたりますが、僕が最も重視している情報は臨床医学論文です。臨床医学論文とは、動物などを研究対象とした基礎医学論文ではなく、人を対象とした臨床研究の結果をまとめたものです。いわゆる「エビデンス」のことですが、以下では単に論文と呼ぶことにします。

論文の読み方や臨床での活用に関して講演する機会は多いのですが、「そもそも、なぜ論文を読む必要があるのでしょうか？」という質問を受けたことがありました。逆に言えば、自ら論文を読まずとも、添付文書（薬機法に基づいて製薬企業が作成する薬剤師向け製品情報）さえあればこなしてしまう仕事が、良くも悪くも薬剤師業務の多くを占めているということかもしれません。

論文を読む必要性について、差し当たり二つの目的を答えることができます。一つは、臨床医学において、これまでに何が分かっている、何が分かっている



医療法人徳仁会中野病院薬局
青島 周一

これから「薬」の話をしよう

なぜ論文を読む必要があるのか

のか、その境界を知るためです。二つ目は、薬の効果を知るためです。前者は、研究者が研究的疑問を明確化するためのプロセス、そして後者は薬剤師の実際的な仕事に関わるものです。

薬の効果を知るために論文を読む。そう聞いて違和感を覚える人もいるかもしれませんが。例えば鎮咳薬の添付文書を開けば、その「効能または効果」に咳嗽と明記されています。鎮咳薬は咳の緩和に効くことになっているわけですから、論文を読まずとも鎮咳薬には効果があると、容易に判断できます。しかし、薬の効果とは「あり」「なし」できれいさっぱり二分できるものなのでしょうか。

いくつかの論文を読んでみれば、鎮咳薬の有効性の8割以上がプラセボ効果である可能性を垣間見ることになるでし

う（例えばPMID:12099783）。つまり、鎮咳薬の効果成形作っているのは、薬理作用に基づく純粋な効能というよりはむしろ、薬の味や色、匂い、そして効果に対する信念なのです。

このことはまた「どの鎮咳薬を選んでも大差ない」というような、臨床判断の多様性をもたらしてくれます。この多様性こそが、患者さんのニーズに対する柔軟な対応を可能にさせてくれます。

さらに「プラセボ効果を最大限に引き出すためにはどうすれば良いだろうか」というような、患者さんとの向き合い方を考えるきっかけにもなるでしょう。そういう意味では、論文を読むことは薬剤師と添付文書の関係性を、薬剤師と患者さんの関係性に編みかえることと言ってもよいのかもしれない。

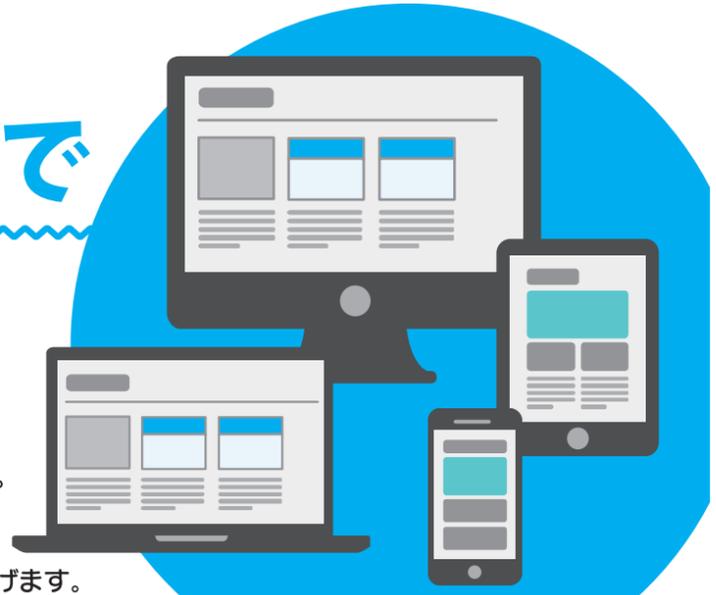
PC・スマホ・タブレットで 24時間いつでもどこでも受講

薬ゼミをオンラインで

勉強時間が限られる **現役生も**

近くに薬ゼミがない **卒業生も**

43年培った薬ゼミの合格メソッドをオンラインに集約！
薬剤師を目指すすべての人に、通わない国試対策、という選択肢を。



新型コロナウイルス感染症と闘う全ての医療従事者の方に心から感謝申し上げます。